

プロレタリア通信

第14号

1988年11月15日

1部 100円

〒170-91

東京豊島局

私番箱59号

発行プロレタリア通信編集委員会
 ☆万国の労働者団結せよ!!
 ☆帝国主義打倒・被抑圧民族の解放!!
 ☆スターリン独裁・プロレタリア独裁・社会主義
 ☆国際非合法党の建設!!

天皇制は廃止しないなら



九月十五日、天皇が重体におちいってからテレビ、新聞などのマスコミは、連日天皇の容体(体温、脈搏、血圧、呼吸数など)について、何度も報道を繰り返している。そして、皇居や各自治体に設置された記帳所には何百万人もの人々が訪れ、天皇の病氣回復を祈って署名をおこなっている。見たところ天皇の容体は少しづつ悪くなっており、回復のきざしはうかがえない。自民党政府は、すでに天皇の死に備えて、新しい元号の制定、諸儀式(葬儀、新天皇の即位など)の準備を行っている。警察や自衛隊は、非常事態に備え戒厳体制に入ろうとしている。

天皇制は、現在の天皇が死んでも確実に存続するであろう。では、天皇制はプロレタリアートにとっては何を意味するのか。敗戦前の天皇制は、被支配階級と被抑圧民族にとっては、日本帝国主義の侵略と他民族の抑圧、植民地支配、搾取と収奪、差別と分断支配、政治的弾圧そのものを意味した。明治維新以来、日本の支配階級は、天皇を中心とした国家体制を確立し、資本主義を育成し、発展させ、朝鮮・中国・東南アジアに植民地を獲得するために戦争と侵略の道を辿ってきた。第二次帝国主義戦争では、日本帝国主義は、連合国を相手に戦い、日本人民とアジア人民など数千万人の犠牲者を出した。天皇は日本帝国主義の最高責任者であったが、戦争犯罪人として処刑もされず、戦後も「日本国憲法」の下で、日本国家の「象徴」として生きのびてきた。天皇制が生き残ることができたのは、アメリカ帝国主義などと日本の支配階級との取り引きの結果であり、また日本のプロレタリアート人民が、天皇制を階級闘争によって廃止できなかったからでもある。今日、日本帝国主義は、国際貿易と資本の輸出を通じて、世界の経済的侵略を展開している。したがって、天皇が日本国家の「象徴」である

かぎり、全世界の被抑圧人民から見れば、天皇は現在の日本帝国主義の侵略の象徴となっているのである。だから明治維新以来、天皇制は一貫して国際侵略のシンボルであったのである。

戦後の天皇制は、国際帝国主義によって存続を許されてきたのである。日本の独占資本のために階級支配の道具として役立ってきたのである。それ故、われわれ日本のプロレタリアートは、「日本国憲法」の廃止とプロレタリアートの独裁を要求するのである。我々は、天皇制廃止のための闘争を日本帝国主義の打倒と米軍基地の撤去、米軍追放のための革命運動の中に位置づけて闘わなければならない。天皇制擁護勢力に断固として反対し、服喪の強制を打ち破り、天皇制廃止の闘いをつくりだせ。

新しいブント共闘をめざして

『プロレタリア通信』編集委員会

我々の立場

我々を構成するそれぞれの出自は多岐にわたっている。「行動綱領」と「規約前文」及び学習用パンフレットNo.1第一論文の冒頭において明らかである。さらにそれらを要約すれば次のようになるであろう。

我々は新左翼であり続けると言うこと、それ故にこそ新左翼それ自身をトコトン総括しつくす立場である。このような立場は、学習用パンフレットNo.3において内容上明らかにしたところのものである。

我々の出自の多用性は、雑多な経験と思想性を意味しない。言うまでもなく我々は『プロレタリア通信』5号の「組織活動の再開宣言」で主張したごとく、「いかなる事態にも用意する」組織をつくりあげるために再結集したのである。言いかえれば、そのような経験と思想性こそが我々の出自なのであり、また、出自如何にかかわらずそのような経験と思想性を共有していることからこそ団結したのである。ここに我々の将来も明らかである。我々は大衆運動や市民運動、はたまた超階級的な平和運動の平和的發展の延長線上に革命党建設や

プロレタリア階級独裁が可能だなどとはつゆほども夢想していない。共産主義者とはどこまでも一人一人の思想性の堅固さにあり一人一人の革命に対する情熱、献身にある。問題は、あらゆる大衆の利害を共産主義的組織に結びつけ、世界革命のために利用しつくすことにある。客観主義的に評論し解釈することも運動に埋没することでもない。共産主義者が孤立し分散したこの十数年間の状況は、解党に逃避するか運動に埋没し革命党建設から遠ざかっている。

あの六十年代後半からはじまる武装闘争を自ら担い、かつその敗北を真摯に自己のものとして総括してきた。かかる共産主義者の団結こそが我々の誇りとするところのものである。

我々のこの数年間の思想的営為と組織活動はどこまでも全世界の労働者階級の団結であり、被抑圧民族の解放であり、世界党建設に向けた実践である。我々のこのような実践と試みに共鳴する諸団体と共通の実践をさらにつみ重ねたいと言うのが党派・ブント共闘への基本的な考え方である。

新しいブント共闘について
なにをもって新しいとするのか。

六十年安保を前にして「安保がつぶれるかブントがつぶれるか」を心意気として日本共産党から分裂して結成した第一次ブント。七十年安保粉砕と全学連再建をスロガンとして結成した第二次ブント。更に、一九七二年連合赤軍の敗北以降、幾度となく試みられた赤ヘル共闘。これらはいずれも明確なヘゲモニーと路線を持ち合せていなかった。したがって権力とのシビアナ関係を通した具体的展望を欠落させていた。そこに指導部の互解と共闘の相次ぐ破産があった。権力をなにがなんでも奪取するという革命党建設に賭けるガッツ・パトスという一点で曖昧であり、極めて不十分であった。倒すか倒されるかは生半可なことではない。

動労は一九八五年全国大会で国鉄分割民営化反対の方針を外した。そして松崎明動労委員長は一九八六年四月号『文芸春秋』対談で「権力が見えてきた」と述べた。我々にとって権力を見たのは文字通りあの武装闘争によってである。自らの権力樹立に向けた徹底したブルジョアイデオロギーとの闘争をへた人民大衆との絆の重要性を改めて思い知らされたのもあの闘いであった。我々は意識的に「右派」を切ることによって自らの道を切り拓けなかった弱さ

を克服しなければならぬ。本格的な党建設とはレーニン流にはあらゆるものを利用し尽くすのであって切り捨てることでは決してない。権力闘争のシビアナとは一旦もつものを持ってしまった党派のあり様をも示しているのである。

我々は一般的に言って人民大衆は統一すべきであると考えているものである。とはいえ無内容無原則に統一することは「世論」なるもの、ブルジョアイデオロギーへの屈伏に他ならない。

権力を見たもの、権力を見るために本格的な党建設が要求されている。そのための一里塚として、今日の小分派ならざるを得なかった現実をば否定的に把らえ、かつ総括しつくす立場での共闘である。このことを「社会主義競争」と表現してもよいであろう。このことは単に街頭闘争にとどまり得ないであろうが、なにはともあれ大衆的実力闘争の隊列を整えることからは始めねばならないであろう。ものごとには「はじまり」と言うものがあるのであって、何処からはじめるのかのけじめをつけねばならない。

独自の政治潮流について
なにが独自か、それは我々の政治内容・路線そのものである。我々にとっての焦眉の政治は労働組合の連合化でも、消費者運動でも

ない。依然として三里塚をはじめとする「反基地」闘争・反戦・反安保闘争である。

さらにはできることなら国家たる組織（公務員・警察・軍隊）の暴露（汚職と犯罪行為の暴露）を煽動することである。我々は、ブルジョア新聞に勝てる宣伝力を持つていず、その限りでは、敵の政策に一定限られた反対闘争を余儀なくされている。しかし、国家をめぐる闘争は、国家の弱体化と自らの権力の強化である。この点では敵の腐敗を暴露することは重要な意味をもってくるのである。

我々の独自の政治とは、三里塚をはじめとする「反基地・反戦・反安保」である。更に、未組織労働者の組織化、被抑圧民族解放との連帯、被差別解放闘争である。とりわけ、日本資本主義の帝国主義的発展にともなうところの在日外国人出稼ぎ労働者との連帯は重要な意味を持つてきている。これらすべてにわたる全面的な組織展開、すなわち「政治を張る」ことは現在のには不可能である。それ故にこそ、三里塚をはじめとする「反基地・反戦・反安保」の闘いとして新たな政治潮流を形成してゆかねばならない。なぜなら、同じ大衆闘争、民主主義闘争であっても即権力問題であるからである。大衆的勢力、力の意味するところの闘いだからである。

我々は中流意識を喚起する運動の担いではない。独占資本に搾

取され、抑圧されている人民大衆の目覚めにこそ期待する運動でなければならぬ。

今、何故に三里塚なのか。
「プロ通」12号、13号で述べたように三里塚闘争は農民と新左翼が共同でつくり上げてきた闘争である。三里塚以上の闘いを左翼はいまだ作り出していない。だからこそブルジョア政治委員会は何等メリットのない三里塚空港に固執していると言ってもよいであろう。今や、三里塚は新左翼の代名詞とさえなっている。三里塚からの後退は絶対に許されないのである。

我々は一般的に赤ヘル共闘や運動の統一を主張しているのではない。すでに述べたように「権力を見るため」であり、全く新たな関係と政治として党派共闘の必要性を主張しているのである。

三里塚を敢えて具体的対象として例示するのは、新左翼諸分派の政治がこの二十二年間展開され、この五年間にその政治傾向がより鮮明になってきているからである。これが第二の理由である。なんとすれば、革共同政治はかつての立川・砂川基地拡張反対闘争で実験済みであるところの抱え込み運動であり代行主義政治である。革共同中核派の政治とは小ブル急進主義とか、民主主義的急進主義では断じてない。まして内ゲバとテロリズムとしてのみ批判されるよう

なものではなく、その本質において批判されなければならない。

黒田イズムにおける革共同二派は、その本質において徹底した一國主義にある。ここに組織運動に於ける排外主義もある。ここに彼等の反スターリン運動も外在的なものとならざるを得ず党派闘争も相互変革とは把らえられず、打倒の対象としか把らえられないのである。

我々は、小セクトの抱え込み運動としての三里塚を開かれた大衆闘争の場に解放するのである。我々は、革共同中核派の政治を小セクトの抱え込みと市民主義政治と規定する。彼等の街頭主義はかかる政治の展開としてあるのである。この市民主義が構造改革派や消費者運動と唯一異なるのは、小セクトによる街頭主義的代行主義にある。代行主義の貫徹の思想こそ血債の思想であり、我々の「自己解放主義」と決定的に異なるところである。

三里塚を踏み絵とするのは新左翼政治の一つの典型をなしているからに他ならない。三里塚は、二百戸に及ぶ農家を拠点としての典型であるばかりか縮図でもある。ここに我々の政治を！クサビを！断固として打込まなければならぬ。

大衆的実力闘争について
大衆的実力闘争をあえて今主張
しなければならぬのは何故か。

労働組合においても、三里塚に
おいても、あるいは、七口ヒトの
病氣とそれにまつわる状況におい
ても、物事は憲法や法律や条例の
拡大解釈によって実行されてきて
いる。つまり、資本家と政府・公
団と「世論」などと我々の力関係
が物事を決定してきている。「参
加する政治」では不十分なのだ。
どのような心構えで参加するかが
問題なのである。

人民大衆の創意あるパフォーマンス
を否定するものではない。人
民大衆はすべからず日常的に政治
に参加しなければならない。数年
間に一度の投票行為が参加の全て

「二期阻止・違法な強制収用許すな！」

11・6全国総決起集会」報告

政府空港公団による90年概成に向
けた強制収用策動を粉砕すべく、
三里塚芝山連合空港反対同盟より
呼び掛けられた「二期阻止・違法
な強制収用許すな! 11・6全国総
決起集会」は前日東京から走り抜
いたサイクルキャラバン、公民館
に泊り込んでの木の根へのチュウ

でなく、工場で、地域で、学校で
すべからず人民は自己の不利益と
闘わなければならない。

敵権力や資本家の不条理にたい
して決然として起き上がる思想で
ある。思い込みではなく、実践的
に路線化することである。例えば、
三里塚のこれからを見よ、空港包
囲・人間の鎖やサイクリングも支
持するものである。だがしかし、
それらがイベントとしてのみ意味
するのであれば誤りである。そう
ではなく次のステップ、内に秘め
られた覚悟の下のイベントを楽しく
するのは素晴らしい試みだと言わ
なければならない。

一九八八年十一月六日

り、木の根へ空港駅を人間の鎖が
約一、五kmにわたって結び、プロ
レタリア人民の堅い決意を敵空港
公団に示したのである。

集会は二時半より菅沢事務局長
の司会で開始され、石井武氏の開
会の挨拶、熱田代表の「今、現地
には収用法というバケモノがあら
われ、これを打破らねばならない
という局面を迎えている。これに
対し小川源さんはじめ地権者は、
やるんならやってみろ、受けて立
つ、という決意に燃えています。
我々の気持ちは一貫し、変わるこ
とごさいません。……反対同盟
もさらなる決意をもって、勝利の
日まで闘い抜くものであります。
」という挨拶へと続いた。

基調にかえて発言をした石毛博
道氏は「今後もっとも重要になっ
てくるのは、やはり木の根を防衛
していくという運動。源さんや用
地内で生活している人達の生き方
は、ごくあたり前のように見える
かもしれないけれど、社会的には
異常といえる状態の中で、大変な
頑張りややっている。こんな異常
な状態を許してはいけない、その
ことを今後さらに外に向かって訴
えていかねばならない。

事業認定が下されて、すでに十
九年たちました。この間に住
む人達が邪魔者扱いされてきたわ
けですが、来年には二十年になる
。収用法から言っても、もう事業
認定は無効なんだということを、
強く訴えていきたいと思えます。

……」と述べられた。

つづいて登場した小川源さんは
「土地を守って闘う反対同盟は何
一つ落度はない。法律を無視して
いるのは政府・公団の方で、彼等
は機動隊の暴力で我々の土地を奪
おうとしているんだよ。だが源は
、たとえ一坪の土地も売渡しはし
ません。……共に団結を密にし
たたかいぬけば二期は絶対に阻止
できる。……我々は法に負けな
い闘い、金に負けぬ闘い、農地
死守で必ず勝利する。」と述べ、
清場の拍手を浴びて、降壇した。

「論叢」を読む



リーフレット版の「論叢」NO
一〇号を読んだ感想を述べる。

「論叢」は赫旗首都圏委員会か
ら出版されているものであり、私
としてはこのグループと是非とも
一緒に仕事をやって行きたいと思
っている。そうした立場から思い
つくままに感想を述べ「プロ通」
の読者と「論叢」の読者からとも
に批判をおおぎ実のあるものとし
て行きたい。

「論叢」巻頭論文は、ひとつの
政治路線、政治主張を形づくって
いるように思われる。

続いてカンパ要請がなされ、サイ
クルキャラバン、天皇制の賛美・
強化に反対する共同声明運動、土
呂久東京交渉団、山形県シラカタ
マチ農民、泉州沖に空港をつくら
せない住民連絡会、空港包囲を闘
う11・6学生共同行動、三里塚顧
問弁護団、管制塔戦士と発言が続
き、団結ガンパローの三唱のなか
現地集会は終了し、二期阻止・収
用粉砕のシュプレヒコールも高々
とデモンストレーションは、辺田
、中郷をぬけ、三里塚を進撃した
のである。

表題は「『新しい社会運動』と
政治情勢の流動化について」と題
されており、三章構成である。表
題サブタイトルは「社会主義連
合」についての我々の見解とな
っている。

「論叢」を読みながら逐次コメ
ントを加えて行きたい。
第一章は、反原発運動をめぐる
状況と流動化として「四・二三、
二四に象徴される反原発の高揚は
日本における『新しい社会運動』
だ」と規定する。また『新旧左翼』

とひとくくりにしてこの社会運動を理解してはいないと言っている。更に「国内支配としては盤石であったはずの『八六年体制』への、まだ、十分とは言えないまでも明確な対抗勢力が登場し始めたのだ。昨年、地方選での大幅な女性議員の進出、部分的ではあれ、自公民対市民運動という政治的対立軸の出現」—こうした階級状況の認識のもと、これらは世界的同質・同一性とか、社会の構造だとか、こうして「新左翼党派間の論戦と流動化が始まっている」と。

戦後日本の消費者・市民運動には、幾つかの大きな波があったと思う。

第一期は一九五〇年代中端の反戦・平和運動。この特徴は、スターリンからフルシチョフの平和共存論、超階級論に助けられたこと、ビギニ核実験と第五福竜丸の被爆を頂点として「平和運動」なる用語も定着した。第二期は六〇年安保のときの声なき声の運動からヴェトナム反戦の主流派となるベ平連の運動である。この特徴は、日共右派・構造改良派の除名・脱党者がその中心的担い手となったこと。この第二期ではじめて日本では「市民運動」なる用語が定着した。もちろんこのような運動と用語の定着は、日本独占資本主義の帝国主義的発展と軌を一にするものである。

第三期は、七〇年安保の敗北と

内ゲバ三派と連合赤軍事件からの人民大衆の離反、なによりも労働組合運動が二度に渡る石油ショックによって「合理化か首切りか」の恫喝に屈服した。こうした状況を背景として反原発・エコロジー運動「資本主義も社会主義もダメ」とする市民運動と「自己解放主義」の反差別運動が結びついた市民運動である。この時代はまた、マルクス主義が全世界的規模で疑問にさらされ、ヨーロッパでは緑の党などが、かつての反スターリン・マルクス主義陣営から生み出されたのである。日本でも資本論百年を問う学者が雨後の竹の子のように生まれ集いがもたれた。つまり、この第三期の市民運動は、反資本・反マルクス主義とある種一体化しつつエコロジストなる用語を定着させた運動であった。

ところで、現在の消費者・市民運動は、結論から述べれば生活保守、現状維持、自分だけよければなどとする運動である。つまりは中流意識を喚起する意識と運動である。このような運動に対しては、トコトン反原発で警察機動隊とブツカルまでやるべし！と煽動するのは効果的である。意識も変わるであろう。資本や国家をトコトン問うべしと、勇気、づけてやる必要のある運動である。私は、何処までも新左翼であり

つづけたいと考えている。そして自らの新左翼とはどうあるべきかをつねに自省・自問しつつ前進して行きたいと願っている。故に、客観主義的に新旧左翼などと言われるとチョットまってよ！と言いたくなるのである。厳密に新左翼とは革共同三派とブントを指している。まあ！七〇年安保で構革派の幾つかの分派も自称新左翼を主張しだしている。これは全く良いことである。しかし、いまもって、構革正当派を名乗っているのがある。『現代の理論』派とフロントである。このような人々に我々は、こっちの水が甘いよ！とさそってやらねばならない。問題は、おさそいする主体をつくることである。こちらが相手が言ってもいないことを言っすり寄るのはどうか。

フロントを新左翼にしてやるにはどうしたら良いか？さて、第一期と第三期まではそれなりに、日本共産党と新左翼の影響もあって、たしかに自民党にある程度の抵抗勢力たり得た。しかし、今日の市民運動、「いのちと祭り」実行委に象徴されるように自民党の大御所・全中・全農が参加している。電力会社と科学庁は、まあ、少しは原発の必要性を宣伝しようか。と言う程度だ。社会の治安がおよびやかされるなどはツユほども考えていない。何故だろうか。

『論叢』巻頭論文第二章は「社会主義連合」へのそれへの評価となっている。

「社会主義連合」は「人力」と「フロント」が中心ではじめたものだが、十月にはすでに空中分解した。

『論叢』は肯定的に評価している。

支持の論点①政治展望がつくれる—どのよう？②運動から政治に転化して行く可能性—ではブント共闘では？③「建党」でなく「政治連合」だから支持する—建党の方が良いのでは？

以上三点が支持の理由、そして、新左翼では試みられなかった歴史的事業だから素晴らしいとまで言う

うわけである。では、ブントで述べるなら、再建社学同まで、そして日韓までの三派(中核・青解・ブント)更に第二次ブントを少し勉強して欲しい。

反対の理由として『論叢』があげている三点—①建軍・ゲリラの排除②たたかうナショナルセンタ—③赤と緑、など。この三点こそ重要ではないか。私は、自分の手足を縛られるような如何なる協定にも反対である。フロント・人力にはそれなりのおもわくがあつて始めたのであり、そのおもわくが破産したのである。そこに「あたらしい社会を創造するフォーラム」がある。

年末一時金のカンパの要請

『プロ通』を発刊して三年目を迎えようとしている。

一九八九年春には『プロ通』を公然機関紙として、われわれの文字通りの機関車とする決意である。

一 昨年、われわれの目に見える関係のうちに二つの大衆団体が全国化した。また、この三年間に反天皇制運動と沖縄民族自決

派の運動は定着をみせ、われわれの地歩を築きつつある。そして、何よりも三里塚空港の廃港への闘いは正念場をむかえわれわれの圧倒的政治組織指導が要請されている。これら運動の断固たる指導のためにも機関紙の公然化は火急の任務となっている。

に反天皇制運動と沖縄民族自決

なにか、イベントを打ちあげていなければもたないような政治に私はシンパシーを感じない。

『論叢』の皆さん。問題は、ブントが二〇派もあるような現状を打破しないかぎり、他党派（革

特別寄稿

サンディニスタ人民軍は行く。

されどドルが欲しい！

—ニカラグアから—

共同・革労協・構革派）は一顧だにしてくれないだろうと言うことをお互いに確認しようではないか。

先ず『論叢』と私たちが仲良くできないで他党派と仲良くできる

高橋

はずもないということです。このことは他党派がそのような眼で見ているのだと言うことを自覚しなければならぬでしょう。ということ。

(1)

ニカラグアでは、この七月革命八周年の記念日を迎えた。一九七九年七月一九日、サンディニスタ・全国解放戦線(FSLN)に組織されたニカラグアの民衆は蜂起して、ついに四六年に及ぶソモサ一族のニカラグア専制支配に終止符を打つに到った。

以来、カーター、レーガン政権の下でアメリカのファシストたちやCIAによるニカラグア革命切崩し工作、軍事介入にもめげず、ニカラグアは軍事的防衛の成功はもとより、国内の政治的基盤と社会的な諸改革を定着させてきている。

カーター人権擁護政府はさかんに、ニカラグアでは人権が抑圧されていると国際的に宣伝にやっき

となったが、それはニカラグアの国土と大衆を搾取し続けて私腹をこやした、アメリカ資本とソモサ一族の権益でしかなかったことは明らか。そして人権擁護政府が失墜するや、二番手レーガン政府はCIA、アメリカ人雇兵およびニカラグア旧勢力からなる。コントラ。支援と兵器供与のため、恥知らずにもアメリカ議会予算通過にやっきとなっていることは説明を待つまでもない。

コントラ勢力は、アメリカ資本とアメリカの政治的権益のために意のままに動く隣接国、ホンデュラス、エルサルバドルとコスタリカ領土を出撃拠点として、ニカラグアへの軍事的・経済的破壊工作のゲリラ的作戦を今なお継続している。私のニカラグアに到着した

日の新聞には、コントラ部隊によって焼き打ちに合ったトレラートラックの現場写真が一面に載っていた。

革命政府の下でニカラグアにある銀行、保険および選別された企業は国有化されると同時に、ソモサ一族の私有した農地の接収と土地改革によって小作人に農地が供与され、アメリカ資本のコーヒー園も合せて国有化されている。そして、公教育、医療、女性の権利の充実および地域格差の解消などが、主要な社会的政策として実行されている。地域格差の解消とは、ニカラグア植民地支配の歴史的、言語的分断の単一化を意味し、かつてイギリスによって領有され、金鉱生産では世界の十指にも数えられたことがあったカリブ海側岸

と、スペイン領有による太平洋岸とに二分され続けた国土の歴史的経緯をも越えることであった。今日でもミスキト(Miskito)と呼ばれる言語を話す多くのニカラグア人がいて、全国的に共通語化されているスペイン語ですら、一種独特なものとなっている。メキシコはじめ他のセントラル・アメリカ諸国では結構間に合った、ブロンクンな私のスペイン語はこのニカラグアではなかなか用を足さな

われわれは、新しい政治潮流、新しい党・ブントの建設、新たな党派・ブント共闘を実体的に牽引しなければならぬ。革共同政治と構造改革派政治と異なる政治としての人間解放の息吹きを実践的に創造してゆくのである。ここに、われわれの機関紙の位置がある。単に宣伝と煽動にとどまることなく時代にあった人間解放の哲学をもった新聞とならなければならぬ。そのような新聞として定期刊行してゆくであろう。

面にさしかかっていることを意味する。機関紙を中心とする組織活動でなければ組織は運動に溶解しかねない。ここに、われわれの機関紙活動における独自の活動がある。

「ここに『プロ通信』読者のすべての諸君に年末一時金のカンパを要請するものである。」

『プロレタリア通信』編集委員会
一九八八年十一月十五日

いという始末であった。

私がニカラグア入りして受けた第一印象というのは、兵役に向かうのか休暇のためか、一般の人に混ってなかなか来ないパスを気長に待つ、銃を持った兵士の気取らない姿である。エルサルバドルやホンデュラスの兵士に散々カービン銃でおびやかされた後であるだけに、このほか親しみを感ずるものがあった。まるで労働者が勤務に向かっている姿と何変らぬ兵

士たちには、まさに祖国防衛に励む素直な表情を見ることができた。首都マナグアの街頭で見た軍用トラック部隊で、荷台に鈴なりになつた兵士が沿道の人に手を振る様などは、まさに、人民軍は行く姿そのものであった。

FSLNを中心としたニカラグア革命の特徴のひとつをその人民軍あると言えれば、特徴の第二は女性の積極的な参加をあげるべきである。一九七九年の革命でも、息子や娘の命をソモサ独裁政権の弾圧で奪われた母親たちが、まず人民蜂起の先頭に立ち上つたといわれる。祖国防衛の軍務に女性が参加している様子は、兵士姿の女性が街頭でも多く見られることからも指摘できる。同じセントラ・

アメリカの他の国で女性が満艦色に朝早くから洗濯に励んで水道を専領してしまう。そんな洗濯魔の生涯に終始する女性の生き方から解放された、大胆な社会とすら感ずる。

それもそのはず、サンディニスト全国解放戦線の「サンディニスト」とは、ニカラグアに革命の芽を根絶やしにせんものとい一九三六年にソモサ一派に虐殺されたオーギュスト・セザール・サンディニノ、その人の名に由来するのであって、サンディニノは「解放された男と女」のスローガンを掲げた、ニカラグア革命の原点をなす人物である。さらに、ニカラグア革命

の文献に目を通すと、今日、世界でこの国の革命運動ほど純粋にカール・マルクスの思想と哲学を前面に掲げたものはないのではないかと考える。マルクス主義の普遍化としてではなく、マルクスその人の思想を革命の原点にとらえ返す姿こそ、サンディニストなるゆえんともいえる。なぜなら、セントラル・アメリカ諸国こそマルクスが「資本論」で説き明かした「搾取」の経済学的展示場であり、かつ「人間解放」の純粋な夢を語らずにはおかない、ラテン・アメリカ特有の荒っぽい政治支配があつたからである。そして、今なお継承されている。この経済的に貧しいセントラル・アメリカが、現在日本車の独壇場となつているのだから考えさせられる。

当然のごとく、ニカラグア革命はアメリカの軍事的政治的介入からなる危機をからくも凌いでいるとはいえず、その困難を突破すべく、けるラグア革命司令でニカラグア共和国大統領でもあるダニエル・オルテガ・サアベドラは、アメリカの帝国主義者たちの胸元にある国連本部に乗り込んで国際的な正義の擁護を要請してニカラグア革命の認知を求める大胆な行脚を実行し、アメリカの良心層に対してすらレーガン政権のファシスト的介入をストップさせることを呼び掛けている。ローマ法王のニカラグア招へいで、世界的な良心の注

目をはたらきかけもした。同時にラテン・アメリカの旧宗主国、スペインに外交的な支援を、ソ連には軍事的支援を取りつけることも成功して、ニカラグア革命はラテン・アメリカ世界の新しい確固たる道を歩んでいるように見える。

(2)

私はアメリカ再入国にさしつかえること間違いないので、何とかニカラグア入りを回避して南米に渡る方法はないかと苦心していた。もちろん航空機を使えばいい訳だが、できるものならそういう安易で無駄な方法は最後の手段に残して置きたかった。マヤ遺跡を追つてメキシコのユカタン半島北部から旧英領ホンデュラス、そしてベリーズという初めて知った国を通過してグアテマラまで来た。期待してこのグアテマラのカリブ海岸の港町アエリト・ヴェリオスに来てみれば、ここから南米に向かう船はない。「ホンデュラスかベリーズから船はある」と教えられたので、そのどちらへも船で行けるというリビングストーンに船で乗り込んでみれば、そこはツーリスティーックな避暑地でしかない。とてもホンデュラスに行く大きな船などやってくる訳がない。そして、船がなければ最後の手段に飛行機でも探そう、とまたベリーズに入ってしまった。港といえば、沖合いに大型船が停泊してハシケで連

第一二回△日宿の案内

われわれは、日本の労働者階級の状態を明らかにするとともに、われわれの政治路線を確定して行きたいと考えている。もとよりわれわれは、全世界をこの眼で視える関係にしたいと考えているばかりでなく、全世界をわがものとしたいとさえ熱望してやまないものである。そこで、日本の戦後民同型労働組合運動の転機となるであろう『連合』の結成の意味を問うこと。第二に、この歴史的転換に伴う社会科学の混乱、とりわけ、国家と権力規定をめぐる混乱に対して戦前の日本とヨーロッパ(ドイツ・イタリア)の経験から何を学ぶか。最後に日本資本主義を形成する原資過程と現代独占資本主義にとって少数民族(アイヌ・沖縄)の状態を明らかにして行きたい。

以上、四点にわたって基調を主催者としてそれぞれが提起するといえ、出席者は積極的に自己の見解を表明することによって討論を自ら組織してもらいたい。つまり、この合宿においてまとめられるのではなく、議論は自己の実践のうちに獲得されなければならないと考えてからにはかからない。ただ、合宿を通じて、多くの現場を共有するとともに、新たな飛躍した関係をつくる土台となれば主催者としてこのうえない喜びである。したがって第二回、第三回とこの合宿が継続できることが重要だと考えている。

第二回の政治討論合宿の案内を致します。

第二回目の合宿のテーマは、本年五月合宿で討論され一定の方向づけがなされたところの戦後労働組合運動の総括である。この総括の内容をより詳しく展開するとともに新左翼三〇年間の階級的労働組合運動を分析することにある。

二つ目のテーマは、この集まりの歴史的位置付けについてである。われわれの結集の意義についてである。「新左翼の総括と党建設の展望」となるであろう。このことはまた、われわれが何処から何処へ行くこととしているのかに込めることになる。

一 参加予定人員 約二〇名

一 日時 一九八九年正月二日、正午より三日五時

一 場所 東京都区内

新年早々ですが万障繰り合わせのうえ出席下さいませよう。

主催 日本経済研究九人会

絡するようなベリーセ市からは、残念ながら適当な船ばかりか飛行機さえも見つからなかった。「二日後にコロンビア行き貨物船が入る」とまことしやかな話に踊らされて、私は無駄日も送ってしまった。しかし、キャプテンに会って貨物船に乗せてもらえるかもしれぬと思った時には、むしろ身の危険も覚悟したものだ。古い話だが、貨物船に乗り込んでカリブ海に消されてしまった男たちの話を小説で読んだことがあるからだ。

こんなことで、結局ガタゴト・バスで丸一日も揺られてグアテマラにまた戻って行った。心はもうすっかり決まっていた。ファシスたちに何遠慮があるものか、ニカラグアに行つてやれ。うわさ通り国内が革命で荒れて、内戦が続いているなどとは信じられない。この際ニカラグア革命をつぶさに見聞することこそ意味あるというものだ。ニカラグアはエルサルバドルの首都サンサルバドルで取得するのがいい。なぜなら、リビングストーンからベリーセに戻った日、物騒なベリーセ市の町なかを真夜中に二人で一緒に一〇軒もホテルを尋ね回った、エルサルバドル人で電気工学の教師だというホセがサンサルバドル市に戻っているはずだったから、彼の招待に応じて訪ねればビザ取得を助けてもらえるし、サンサルバドルの休日を楽しめると思ったものだ。エルサル

バドルは物も安いし、いい所だからついでに寄ってくれと彼は言ってくれていた。私が何かの本でエルサルバドルのことを読んで限りでは、もともと広大で緑豊かな隣国ホンデラスから分離した、狭い国土の貧しい国、いいものはみなホンデラス側に取られてしまっている国というような話だったので記憶していた。

まず、アメリカ資本の広大なバナナ・プラントの真ん中に原生林のたぐいまれな残す、グアテマラのキリフ遺跡を見てから山道をバスでホンデラス国境に入った。そしてまた山道を二時間も走った、標高六〇〇メートルの所にコパン遺跡があった。コパンからはホンデラスの首都テグシガルパに出るよりもずっと近い距離にあるから、何なく南下してエルサルバドル入りできるようにさえ思えた。しかし山がちな国境周辺は簡単に進めず、日暮れてホンデラス国境の町で一泊せざるをえなかった。翌日、昼頃サンサルバドルのバスターミナルに着いてみれば、そのあまりのごちゃごちゃとした喧騒に恐れをなして、ひと息入るとただちに市内バスを探し当ててホセの家に直行してしまった。恐れをなしたといえ、エルサルバドルに入るや軍隊によるバスの検問や身分改めがやたらにあり、首都の辻々にカービン銃の兵士が立つ異常な雰囲気があった。ホセ

から聞いたところでは、日本人商社員人質で名を上げたのもその構成部分に入るのか、この国では「エスキエルド」という左翼ゲリラが活動しているというし、ニカラグアと陸続きに国境を接してはいないのに「コントラ」の部隊もいるという。

私はサンサルバドルにはニカラグア大使館はないと聞いてしまったから、やはりホセの家に三、四日居候して、すでにグアテマラ市でビザを取り、ニカラグアに向かうという元小学校教師のドイツ人娘ウルリケと一緒にサンサルバドルを離れてしまった。ホセは電気工学の教師というが、失業中で、子供が五人もいる姉の小さな家に居候しているような状態では、いくら彼がゆくりしてゆけると言っても、その言葉に甘えるにはあまりにも気を遣う要素が多すぎるというもの。ウルリケは若くて魅力あるドイツ娘だったから歓迎されていたかもしれないが、私の場合は同じくはいかない。ニカラグアへの道は一度ホンデラスに抜けてからしか通じないので、私はホンデラスの首都に出てビザを取ることにした。そしてホンデラス国境に向かったこのバスの旅もまた、物々しエルサルバドル軍の検問を二度も受けた。その検問が高圧的で暴力的なものにも驚かされる。エルサルバドル人の乗客やバスのスタッフは、反感も持

たないけれども協力もしないという白けた態度で、兵士たちのいいなりにするようつとめていたが、全員バスから降ろされて男女別々に道路沿いに一列に並ばされる。まるで囚人か捕虜扱いである。それで全員の身分改めをするというでもなく、適当にいふかしいと思ふ人間を選んで尋問するというのだから陰険で、どう喝的なことこの上ない。ウルリケと私はこのほかしつこく尋問されたし、私の身体から持ち物を細かに調べた。三細かに調べるのを見ては、アホらしさも通り越しておかしくなってしまうほどであった。彼らがウルリケと私にあびかせる質問は、「ニカラグアに行くんじゃないのか？」であった。誰れがほんとうのことなど教えるものか。自らコントラ部隊と連合してニカラグア領をおびやかしておきながら、ニカラグアに行くんじゃないのかもしれないんだ。大体において、カービン銃を振り回すばかりのようない、田舎から出て来たばかりのようない若者に複雑な国際問題へに対応がでる訳がない。

何とかエルサルバドルの国境は抜け出たものの、悪いことにウルリケはホンデラス国境の警備兵に、沢山押ししてある東ドイツ入国スタンプを理由に入国を拒否されてしまった。出入国管理官でもない彼らの権限外のことであるから、

とりあえず荷物は残して出入国管理事務所に行くことを私は彼女に勧めた。とたんに盾先を変えて、彼らは私の荷物を徹底的に調べ出した。あの高圧的なエルサルバドルの国境整備兵だって何も問題にしなければ東ドイツのスタンプなど、どうということはないはず。警備兵が注文をつけたということ、入管の職員も軍を無視できないとも思ったのか、二五ドル出してホンデラスのビザを取らなければならない。彼女は二五ドルなどとも払う気になれないと、結局エルサルバドル領に戻り、係管が親切にも教えてくれた、コントラ部隊よろしく船で対岸のニカラグアに直接入る道を選んで引き返して行った。そして、私はテグシガルパに向かった。

ホンデラスの首都テグシガルパは、これが首都かと思しきほど奇妙な町で、標高は九〇〇メートルもあるという山あいになって、スリパチの底みたいな山肌のでデコボコした所にアミーバの分節分枝してゆく形のように伸び広がっている。空高くにはハゲタカが沢山舞い、この時期は日中の猛暑後、夕方には絶えず土砂降りの夕立ちがやってくる。私は安宿にもぐり込んだものの、週末にぶつかって両替もままならずいたところ、宿近くの中料理屋の中国人がいいヤミ値でドルを両替してくれるというので、私はつい虎の

子の百ドル札を手放してしまった。ニカラグア・ビザの申請には米ドルが必要だということは知っていたから、月曜日を持って銀行でトラペラーズ・チェックの換金をまず第一番目の用事にしようとしていたのに、ヤミ値の良さに我を忘れて手順を間違えてしまった。案の案、タクシーで乗りつけたニカラグア領事館では、ホンデュラスの通貨はおるか、フランス・フラン札も米ドルのトラペラーズ・チェックすら受けつけない。ニカラグア革命もその経済的実態はロシア流でしかないのかと、私は失望させられてしまった。外国人がロシア旅行をしようと思えば、自分の国では銀行でドルを買えるからいいものの、たとえば日本人の私がフランス辺りからロシア旅行をして日本に戻ろうとすると、フランスでドルがヤミでなければ入手不可能であるにもかかわらずドル払いを要求される。まさに不正を強要するようなもの。政治的にも経済的にも対決を公然とスローガンにしなから、裏では相手のうまみを振り振りかまわず吸い上げようとする思想的無節操さは、当然批判されてしかるべきである。

このニカラグア領事館の窓口近くの壁にも、アメリカのファシストたちを糾弾した新聞論説などが沢山張りつけられていて、「反米ムードのその環境の中で、「ヤミ屋などどこにでもいるから、ニカラ

グアに入りたかったらドルを探して来い！」と言われたようなもの。わたしはいきどおりを覚えないうちはおれなかった。ニカラグアはかかるといふ。あなたたちはアメリカと闘いながら、なぜ、アメリカの経済力に依存しようとするのですか？

「あなたたちはアメリカと闘いながら、なぜ、アメリカの経済力に依存しようとするのですか？こんな矛盾した話はありませんか？は思わないのですか？ ドルを持っている人は腹だたくても払うだろうけれども、そうでない人はニカラグアに行く資格がないという事ですか？……。そんなのはあまり人間を愚ろうした卑劣なやり方で、労働者と農民の革命どころか、ブルジョア讃歌そのものです」。私はもうビザなどどうでもいいし、ニカラグアなど飛行機で優雅に飛び越えてやれと、こんな捨てゼリフをはいて帰って来てしまった。

どんなことをしても陸路ニカラグアを通過する方法が一番う安上がりであることが分かったからである。一度ビザ申請を放棄したその日に、うまい具合にコスタリカか、コロンビアのサンアンドレス島に飛ぶフライトがあったので、宿もさつと引き払い汗だくでバスを採って空港まで出向いたものの、片道切符の出国は不可能で、それぞれの国から出国切符まで無理やり買わそうとするので、これはあきらめる。

ある国なら神聖なる革命をここまで批判してしまつた人間には、二度とビザ申請の受け付けなどさせないだろうけれども、私は翌日ちやっかりとそのビザを取ってしまった。「ビザ申請手数料の二五ドルだけ何とかなりませんか？」と、今度はあの中国人のもとにヤミドル買いに行つた。さっぱり話が分かってもらえないので、銀行で換金した金で耳をそろえて買い上げてもらつたヤミ値の札束をつきつけて、強引に百ドル札をおやじさんに返してもらつた。というのも、

して無駄ではなく、かえってニカラグア革命がセントラル・アメリカでどんな位置にあるかよく知る手がかりとなつたし、その後コスタリカの首都サンホセ市内でも目にしたコントラ要員らしいアメリカ人の男たちを、テグジガルバ市内で見たことだつて有効な見聞だ。アメリカ人なら男だけがたむろして観光旅行に来る訳がない。大体夫婦ものと決まっている。だから坊主頭で英語を話すアメリカ人が三、四人で市内見物しているという者は、前戦から休暇でやって来たコントラのメンバーだと直感できる。

(3)

取得したニカラグア・ビザをよくよく見れば三〇日間有効のもの。ウルリケがグアテマラ市で取つた時には、たった三日間のトランジット・ビザしかもらえぬのに二五ドルも取られて、おまけに二日間もかかるというので文句を言ったら、「ほかではもっと時間がかかります」という返答だったそうだが、私も実際にトランジット・ビザと言つて申請したつもりであつた。なぜなら、アメリカ政府の歓迎しないニカラグア支持者だと決めつけられても、「コスタリカに陸路入るためのトランジットに過ぎません」といい逃れができるからだ。とにかく、もうどうにもならぬ。今

日中に国境を越えるには少し遅すぎる時間だが、万端準備が整つたら一晩だつて無駄にはしたくない。さつと宿を引き払つてバスタミナルに行つてみれば、うまいこと二時に出る、ホンデュラスの国境の町サンマルコス行きの高距離バスがあつた。

物々しい警備やチェックがあるものと緊張して入つたニカラグアゲート、エスピノは意に反していつたてのんびりしたもの。係官たちが暇をもてあまして、サッカー・ボールを蹴つて遊んでいる。初めてのことでも何も知らぬものだから、正直に係官に問われるまま、ホンデュラス側のゲートを越して

しまつてから、残ったホンデューラ
ス通貨レンピラを全部ニカラグア
紙幣コルドバに両替したものを見
せた。そしたら、一〇〇〇コンド
バを残して、ほかの八〇〇〇コル
ドバ近くは没収されてしまった。
領収書らしいものを渡すので、出
国の際返してくれるのかと尋ねれ
ば、首都の銀行で引き出せるとい
うような話だった。実際には、首
都では大蔵省に行けといわれてそ
の通りにしてもラチが明かず、出
国に際して国境で返して返して
れなかつたから、正直者はバカを
見ることは明らか。そればかりか、
強制的に現金六〇ドルをコルドバ
に両替させられた。何という手
荒な通貨管理だ。万事が金次第の
見本のような世界がセントラル・
アメリカならば、その基軸通貨の
ドルにニカラグアだけがこだわっ
ている訳でないのだからと、ニカ
ラグア入りできたうれしさで寛容
になってしまふ。確かに、テグシ
ガルバの外資系の銀行ですらドル
以外の外国通貨の両替をしない。
フランス・フランス札を見れば、
窓口の銀行員はそんな通貨は見た
ことはないともいいたげで、
「フランス大使館に行けば両替え
できるかもしれません」とのたま
わったのはあきれた。円札など
は試していないが、町中が日本製
自動車でおおわれていても、とて
も円の両替えなど銀行では相手に
してもらえなかつたに違いない。

とにかくもニカラグアに入った。
ゲートのあるエスピノから近くの
国境の町ソモトまでは二〇キロあ
って、首都マナグアはこの町から
二一〇キロ離れていることが分か
った。バスがないなどといっても
町まで出れば何とかなると、ゲー
ト近くで人待ちをしていた小型の
日本製オンボロ乗合トラックでソ
モトに向かった。ここからガタガ
タのオンボロ・バスにぎゅうぎゅ
う詰めでバスは出た。途中の町で
一度バスを降り継いで、その日の
うちに首都マナグアに入ることが
できた。

マナグアもまた奇妙な町で、都
市という概念ではとらえられない。
一見、ジャングルの中の壮大な村
といったところで、点在するバラ
ック群を「車でしか行けないぞ」
と言いたげな長い道が熱帯性広葉
樹の中に消えてゆく。「町のセン
ターはどこか？」と人に尋ねても、
「何のセンターだ？」と逆に聞か
れてとまどってしまう。巨大なカ
ルデラ湖、マナグア湖畔の平坦な
原野に分散した町なり集落が、ど
の方向にどのように連絡している
のかさっぱり見通しがきかない。
まるで、ユカタン半島のジャング
ルの中に消えてしまうマヤ遺跡の
集合群だ。バス路線すらクネクネ
と曲がって進むから、方向オンチ
にならない訳がない。軍事的な作
戦だともいうのか、市街地図は
ない、街路はおるか地区の案内板

ない、何もなし。これが私のマナ
グアに対する第一印象である。夕
方のラッシュで、市内バスはぎゅ
うぎゅう詰めであるから、とても
ザック姿で乗り込む勇気は湧かな
いので、タクシーに頼らずにはい
られない。そもそもバスターミナ
ルの近くに宿がないというのもお
かしなものだが、歩いてゆける所
はどっちに進んでもそんなものは
ないというのだから驚いてしまっ
た。そして仕方なしに乗ったタク
シーの運転手は外国人と知るや雲
助に早変わりする、そんな手合いで
あった。散々走り回って連れて行
かれた宿はドル払いを要求してく
る。あきれやら悲しくなるやら、
ニカラグア革命への絶望を募らせ
てしまったものだ。それでも私が
ニカラグアで利用した安宿は三軒
が三軒とも、ドルなどは要求され
なかつたけれども、地元の人々の
連れ込み宿になっていた。文句は
いうまい。円換金すれば、たった
の二〇〇円か三〇〇円で泊まり込
んでいたのだから。

キャピタリストはもういない。
ニカラグア革命は労働者、農民に
よって荷われていると、彼らはい
う。では、首都の危うかしくて油
断のならない様はどうしたことか？
国家の主人がただ入れ替っただけ
なのではないかと考えてしまった
ほど、首都の雰囲気は他のセント
ラル・アメリカ諸国のそれとたい
して変わらない。私がしばらく投

宿していたバリオ・コスタリカと
いう古い市街でも、ありとあらゆ
る商店や人家は鉄格子で囲い込ま
れている。ロサンゼルスダウン
タウン以上に徹底して、この町の
治安は油断ならぬことを知った。

「ここに泊まったアメリカ人と
日本人もカバンを下げて歩き、街
で持ち金からバスポートまで盗ま
れたのだから、大事なものはポツ
ケに入れて肌身につけるだけにし
なさい」と宿のオカミは親切な注
意をしてくれたが、何もかも肌身
につけてしまふ訳にもゆかぬ。親
切ごかしに部屋に大事なものを残
させて、逆に宿で頂戴されてしま
うのではないかと、私はオカミを
疑る始末である。現に、私は第一
日目に泊まった宿で、ズボンのポ
ケットに残しておいた細かな札が
消えてしまっていた。革命の高揚
期のただ中であって、首都の底辺
層の人々は一見時代の流れに納っ
ているようでありながら、外国人
という革命と関係のない部外者
を見ると、格好の餌じきとおもっ
てタガを外すようである。ニカラ
グア第一日目の新聞では、首都で外
国人旅行者のトラベラーズ・チェ
ックを専門にした窃盗団検挙事件
が、十数人の顔写真入りでデカデ
カと報じられたばかりである。本
来、所持者本人以外は換金不可能
なはずのトラベラーズ・チェック
が金になるということは、銀行な
いしは大きなホテルの会計係まで

巻き込んだ組織的な犯行である。
いかにドルがこの国で有難がられ
ているか分かるうというものだ。
つまり革命の旗を掲げ、アメリカ
の帝国主義的犯罪を批難するニカ
ラグア革命政府が、無節操なドル
のかき集めをするのと同じように、
町の中では外国人を喰いものにす
る合法、非合法の手法がはびこっ
ている。

憂うべきかな。ニカラグア革命
は祖国防衛の軍事的戦費の負担を
最重点課題にするがゆえに、ドル
による兵器調達を強いられている
かも知れない。また、現在では、
唯一の国際的商品ともいえるコー
ヒーだけではとてもニカラグア経
済のバランスを支えられるもので
もない。あらゆる経済的困難に直
面しつつも、ニカラグアは革命を
守り抜いているという点では、地
獄のようなバス交通事情や地方の
道路が穴ボコだらけであるなどと、
部外者が感ずるほど深刻な社会問
題ではないのかもしれない。

私のニカラグア見聞は、ホンデ
ユラス側国境からコスタリカ側に
抜けるバスの旅行で終った。巨大
なガデラ湖、カテマラ湖畔の町グ
ラナダや二度も荷物と一緒に屋根
の上に乗ってバスで行ってしまった
コスタリカ側国境の町リバスな
どはいたって静かで、のんびりと
した地方の生活があることを知っ
て、これがニカラグアだと実感し
ている。

(種橋鉄扇)